
生徒会戦争

咲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会戦争

【Nコード】

N8257M

【作者名】

咲夜

【あらすじ】

ある日、人類は人工的に異次元空間を創り出すことに成功した。その空間内では謎の力が使えることが判明し、その力を『魔法』と名づけた。

学生の授業には魔法実習が組み込まれ、魔法を空間内で使用できるようになった。そんな感じの高校で巻き起こる生徒会によるドタバタ騒ぎ。

第1話 行ってみました生徒会室

俺の朝は優雅なクラシック音楽で始まる。

6：00に起床し、ランニング、魔法の練習、そして豪華な朝食……

ゴメン、全部ウソ。

俺の通う黒川高校のHRは8：35分から始まる。

ちなみに俺は生徒会役員だから、多少の遅刻は許される。許されるんだけど、

会長がウザい。というより面倒くさい。

だからこそ俺は毎朝あわただしい時間を送っているのだ。

俺の朝は携帯の無粋なアラームで始まる。

8：10に起床し、食パンを生で飲み込み、服に着替え、顔を洗い、歯を磨く。

ここまでの所要時間は日によるが、大体10分くらい。

そこからダッシュで学校に向かう。学校までが徒歩20分くらいだから、大体2～3分の余裕がある。

そんな、毎日。

パンツ！！教室のスライド式のドアを勢いよくご開帳する。

「よしっ！今日は4分余ってる！上出来だな。」いつもより多い時間思わず呟く。

「いやいや、迅。この時間は所謂遅刻ギリギリだぞ？」

俺にイマイチなツツコミをいれた奴は、俺の親友といってもいいくらい

の友達、

高谷 たかや

ゆう

有だ。言い忘れてたけど俺の名前は長原 ながはら

迅 じん。

下の名前で呼ばれることが多い。理由は呼びやすいからだそうだ。

「いやいや、有よ、いつも俺が登校する時間は何時何分だ？正確に答える。」

「大体8：32分とかでしょ？」

「いかにも。では、今は何時何分だ？正確に答える。」

「8：34分だが……そろそろ席に座ったほうがいいみたいだな。」

「なん……だと？クソッ！朝の時間を無駄にした！！」

「え？それヒドくね？」

こんなふうになられキャラの有だが魔法の技術は上級にあたる。

世界の七不思議になる日も近いかもしれない。

「一時間目なんだっけ？」カバンを漁りながら有に話しかける。

「あゝ実習だぞ、実習。」

「なんの？家庭科だっけか？」カバンからコーラを取り出しプルを開ける。

「いや。魔法の実習だぞ。第3実習室で担当は尾関だな。」

「魔法か……さて、生徒会に顔を出しましょうか。」

「りょくかい。尾関には伝えとくから。」

「サンキュー。残りはやるよ。」

空になったコーラの缶を有の机に乗せて教室を出る。

周りの生徒だってもう俺が生徒会ってこと知ってるから何も言わない。

最初の頃はクラス委員にサボるなって言われたけどな（笑）

「あ！テメエ空じゃねえか！！」

知るかそんなもんwww

魔法について説明しておく、数十年前に我が国日本で人工的に異次元空間を作ること成功した。

その空間の中では、空想上のものであった魔法と思しき力を人類が

使えることが判明した。

その空間と謎の力の研究を続けるうちに、魔法の実現に成功した、という話。

かなり端折って説明したが、実際はもっと細かいだろう。

今のところはこの空間内でしか魔法は使用できないが、この空間内で魔法を使い、科学の研究が行われたりしているため、今の科学技術の躍進に一役買っている。

ただ研究にしか使わないのは面白くないだろうし、将来有望な研究者や実験補助の人員の育成のため、

中学校から授業に魔法実習が組み込まれるようになった。

空間内で行うことは、主に練習や戦闘。実践で魔法を使うことにより、魔法の能力が上がりやすくなるそうだ。喩えとしては数学の基礎問題と応用問題みたいなもんだな。うん。

ちなみに俺は魔法以外はほとんど何もできない。まあ俗に言う落ちこぼれだな。

「階段なげえよ……部屋遠すぎるよ……」

黒川高校は7階建てで、旧校舎と新校舎に分かれている。新校舎は魔法実習が組み込まれるときに建てられたもので、こちらが7階建て、旧校舎は4階建てとなっている。

2・4組の教室は2階にあり、生徒会室は最上階に存在する。最上階にあるのには理由があり、

会長の鶴の一声で決まった。「眺めがいいじゃない!」と。

でもね、会長。生徒会室からは海しか見えませんよ。

「失礼しまあゝす。誰かいる?」

ノックも無しにやっと辿り着いた目的のドアを開ける。

「あ! 迅。いいところに来たわね、コーラ買ってきなさい!」

「はい？」

マッサージチェアにふんぞり返って漫画を読んでいるこの人こそが、

我らが会長、高瀬^{たかせ} 優奈^{ゆな}である。

「聞こえなかったの？ コーラ買ってきてよ。ホラ、このとおり。」

「いやいや、どのとおりッスか…」

仕方なく鞆に入っている最後のコーラを渡す。

「他の役員はいないんですか？」

「まだ来てないわね。なんか飲む？」

さつきコーラを飲んだばかりなので…と断る。

まだ来ていない役員だが……

生徒会に入るにあたって必要なのは魔法の技術。他の教科はカウントされない。

だからこそ俺は副会長たるポジションについているのだ。

役職は5つあり、会長・副会長・会計・書記・議長に分かれている。生徒会役員は授業のほとんどを免除されているため空き時間は大抵この部屋で過ごす。

「優奈会長、そろそろ開催される——バタンツ——！」「優奈かいちよー！！会いたかつげブツ！」校内戦争のことなんですけど、アンケート用紙はいつごろ配りますか？」

ドアを勢いよく開けて入ってきた異物に足払いを掛け、口を封じる。

「あー……いつ開催だっけ？」

「来月の4日です。すっかりしてくださいよ？」

「うーん……今月中盤辺りでいいんじゃない？」

なるほど、今月中盤つと。えーとチヨークは……

「ちよいちよいちよい！無視しないで！？無視だけはやめて！？」

忘れてた。コイツの名前は確か…西原だっけか？

「永山だ！！いい加減に覚えろ！！」

そうだそうだ、中山だ。ウチの会長のことが好きでほぼ毎日告白している厄介者だ。

「役員以外は立ち入り禁止だから。さつさと出て行ってくれ?」
そして、役員ではない。只の一般生徒だ。あ、一応三年生っていう設定だから。

「俺は優奈のことが好きなんだ!付き合ってくれ!」

「私は嫌いだから。帰ってくれる?」

「だったら時間をかければいいじゃないか!」

これもいつものやりとり。仲が良いように聞こえるが、会長はもの凄く嫌がっている。

で、結局俺が追い払うことになる。

「ほれ、出てけ!立ち入り禁止だ!」

永山の足を滅多蹴りにして追い払う。これも毎日。

「会長も彼氏つくらないんですか?」

ひと段落ついたあと、会長に聞いてみる。実際告白されるだけあつて、整った顔立ちに肩より少し長いくらいの綺麗な黒髪。スタイルも良いんだからモテルのは当然だと思っただけど……

「まあ……ね……。」

頬を僅かに赤く染め、こつちをチラチラと上目使いで見ってくる。ヤベエ超可愛い。

「ま、聞くのは野暮つてもんですしね。それより、他の役員のこと聞いてませんか?」

「誰かが休むつてのは聞いてないけど?」

ちよつと不機嫌に答える会長。俺、なんかしたっけ?

「ま、そのうち来るんじゃない?」

「それもそうですね。」

コンコンコンツ——

部屋にノックの音が飛び込む。律儀にノックするのは多分会計だな。

「し、失礼します。」と、少し遠慮がちに入ってくる一年の女子。
うん当たり。

第1話 行ってみました生徒会室（後書き）

どーもです。

稚拙な文章ですがよければお読みください^^
感想や指摘なんかも頂ければと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8257m/>

生徒会戦争

2010年11月11日23時49分発行